

艦これ的怪談

千草流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海に出た

海の恐ろしさを知った

海の恵みを喜んだ

海の災厄を恨んだ

誰もいない孤独な海、そこでナニカを見た。

海というのは昔から災害が多く、また人が死にやすい場所であった。その事が理由であるかは分からないが、海には多くの怪異譚が存在する。海で戦う艦娘を見た、そんな

怪異譚。

目次

1.	海座頭	1
2.	船幽霊	8
3.	付喪神	14
4.	息抜き小話：尻目	21
5.	河童	26
6.	蜃	33
7.	不知火	38
8.	息抜き小話：すねこすり	44
9.	アヤカシ	48

1. 海座頭

「これは以前、私が出撃していた時のことよ」

蠟燭の明かりが、幾人かの影をゆらゆら浮かび上がらせる。蠟燭の火は暖かく安心感を与えてくれる色合いだが、それでいてどこか儂げで臆気で、なんとも知れず不安を誘う。

—— ゆらり

窓の閉められた室内で誰かの吐息が蠟燭の火を揺らす。

—— ゆらり

人の影もまた、蠟燭の火に連れられ揺れる。

—— ゆらり

影は形を変えそこにヒトではない何かを形成する。

—— ゆらり

大きく形を変え、火の揺れが収まるとまたそれはヒトの形となる。

火の揺れが収まるまで沈黙していた川内は、影の揺れが収まったのを確認して再び口を開いた。

「その日は夜戦が長引いて燃料も弾薬も少なくなったから、早々に帰投していたのよ」

—— ゆらり

「またも影が揺れる、しかし川内はそのまま言葉を続けた。

「特別変わったことが合ったわけでもなくて、いつもと同じように鎮守府まで向かって
いた時。鎮守府まで半分くらいの地点でアイツが現れたのよ」

「淡々と作戦結果を報告するかのよう、川内は語りを続ける。

「一応言っておくけど、これは公式の記録には残ってないわ。言ったところで誰も相手
になんかしてくれないと思っただから……」

前置きは良い、早く続きを語れ。そういつた周囲の視線を感じ取った川内は一度目を
降ろし、少しだけ間を開けた後に再び口を開いた。

「初めにそれを見つけたのは私だったわ。真つ暗な海の上で少しばかりの月明りの中、
遠くの方で白っぽい何かが動いていたのが微かに見えたの……」

「最初は深海棲艦かと思っただわ。そこで相手はまだこっちには気がついていないよう
だったから、燃料のことも考えてやり過ぎそうと思っただわ」

「じつと息を殺して相手が去るのを待っていた、もし私達がそのまま前進していれば丁
度斜め向きに交差するような進路を相手は取っていたから、じつとしていれば衝突する
ことはなかったと考えたの」

「段々と相手との距離が縮まってきて、暗闇でもある程度目視できる距離まで近づいた時に気が付いたのよ」

そこでまた、川内は焦らすように言葉を一端切る。

—— ゆらり

影が、笑い狂っているかのようにゆらゆら、ゆらゆら、その形を異形のモノへと変える。

「違うッ……」

まるでその時の心境をそのまま言葉にしたかのように、川内は驚愕を大きく口に出す。

—— ゆらり

川内が突然発した大声に幾人かが反応した、それに伴い影はより一層揺れ動く。

「あれは違う、深海棲艦なんかじゃない！」

「その事に気が付いた時、私は背中に冷や水を垂らされたかのように感じた！そいつはまるで人のような形をして、海に下半身を付けたままで波も立てずに進んでいた！そして何よりそいつの目が、黒くて、黒くて、真つ黒なその瞳が、どこを見ているのか分からないその瞳が恐ろしかった！」

「これはきつと生物じゃない！生きている者じゃない！深海棲艦でも持っている、生物

としての要素をそいつからは何一つ感じなかった！気が付けば私は身体が震えていた！口が震えて、歯が、カタカタ、カタカタ、鳴って！見開いた目は、どんどん乾いていった！来るな、来るな、こつちに来るな！私の中の何かがそいつの存在を拒否していた！」「やがて、数秒か、数分か、或いは数時間にも感じられた時間が過ぎて、そいつとの距離は段々と離れていった。そこでやっと周りを見る余裕が出来たの。それで後ろに付いていた駆逐艦の子たちが泣きじやくつていたり、耳を抑えて俯いていたり、とてもじゃないけど見ていられなかったわ。でも私は旗艦としてしつかりしないといけないうって思つて、私自身まだ震えながらだったけど皆を励まそうとしたの」

「それで、ふと、アイツの向かった方向に視線を向けた」

—— ゆらり

「目が合った。そいつの黒い瞳が私を捉えていた！私は咄嗟に砲を向けた！自分でも意味の分からない何かを叫びながら一心不乱に弾を撃つていた！着弾点が水飛沫で隠れるまで打ち続けた！見るな、こつちを見るな、見るな見るな、見るな！」

「弾を撃ち尽くして、荒げていた息を、抑えながら、私はやってやったという気になっていた。実際に当たったかどうかは分からないけど、もし相手が並みの深海棲艦なら、恐れをなして撤退するであろう程の狂乱ぶりに自分でも分かっていたから、きつとアイツも、と思つたわ」

—— ゆらり

「私は根拠もなく安心して水飛沫が消えるのを待った。やがて水飛沫が消えれば、いつもと同じ静かな海がそこにはあると信じていた、でも……」

言葉を抑え全てが終わったような口調で話を進める川内は、そこで一度言葉を切った。

—— ゆらり

—— ゆらり

—— ゆらり

ゆらゆら、ゆらゆら、影は踊る。嗤い声が聞こえたような気がした。誰も嗤っていない。甲高い耳障りな嗤い声が部屋中に反響している。

—— ゆらり

—— ゆらり

—— ゆらり

キャハハ、キャハハ、影は嗤う。一つ嗤う、二つ嗤う、部屋中の影が狂い嗤う。咄嗟に耳を抑えたい衝動に駆られる。誰も耳を塞がない。

—— ゆらり

—— ゆらり

—— ゆらり

「そいつはまだそこにいた」

—— ゆらり

—— ゆら

—— ゆ

火が消えた。明かりが消えた。影が消えた。嗤い声が消えた。

「そいつの黒い瞳が！まるで意志を感じないその瞳に！私の姿が映っていた！私は叫んだ、砲身を上げた！引き金を引いた、弾は出ない！耳を抑えた、そいつは消えない！目を閉じて、蹲って、叫んでッ！」

—— ゆらり

—— ゆらり

—— ゆらり

誰かがまた蠟燭に火を灯した。

「どれくらいそうしていたか分からないけど、ふと明かりを感じて顔を上げた。太陽の光、いつのまにか夜は開けようとしていた。目の前にはいつもの静かな海が広がっていた。アイツの姿はどこにもなかった」

蠟燭は静かに揺れる。影も揺れる。そこに異形の姿が見られない。嗤い声も聞こえない。

「あれが何だったのか、一緒にいた駆逐艦の子達に聞いても泣きながら首を横に振るばかり」

「正直そいつの姿は詳しく覚えていないし、そもそもそんな奴が本当にいたのかどうかも今となって自分でも疑わしいわ」

「でも、あの瞳は、あの真つ黒な瞳だけは確かに記憶に強く焼き付いているわ」

と言って、川内は語りを終えた。

—— ゆらり

静かに、影が笑いだしたように見えた。怪異の夜はまだ終わらない。

2. 船幽霊

「手が伸びてきたのです」

その言葉から語り始めたのは電であつた。部屋の中では未だに蠟燭の明かりだけが優しく輝いている。

「その頃はまだ司令官も着任したばかりで、人手もまだまだ少なかつたので私も一人で遠征や出撃をすることが何度かあつたのです」

昔を懐かしむように、電は静かに瞼を降ろした。当時を思い出すために幾分かの時間を掛け、再び瞼を上げた。

「その日も私は一人で鎮守府の近海に遠征に出ていたのです。ただ不思議なことにその日は深海棲艦の姿が全く見えなかつたのです」

「おかしいなあ、と思ひながらも深海棲艦がいらないなら順調に遠征が行えると思つてあまり気にしてはいなかつたのです。それで高速修復材も手に入つてそろそろ鎮守府に帰投しようと思つた時にそれは現れたのです」

——パシャ

水が跳ねたような音が、聞こえた気がした。締め切つた室内に水気の物はなく、そも

そも誰もが身を固めて語りを聞いている中でそんな音が聞こえる筈は無かった。

——パシヤ

「スウつと手が海から伸びてきたのです」

「私は初め、それが何なのか分からず呆然とその手を眺めていたのです。でもやがて白く蠢くそれが手であることに気が付いて慌てて砲を向けたのです。深海棲艦の潜水艦が現れたのだと思つたのです。勿論、いままで鎮守府の近海で潜水艦が出たという報告無かつたので私は慌てました」

「その手は何かを探すようにフラフラと動いていたのです。砲を構えたまま少しして、その手の主が姿を見せないことをおかしいと思ひ始めました。それになんだか、その手は凄く悲しいそうだと思つたのです」

——パシヤ

また水が跳ねた。誰かが水を撒いた。

「攻撃してくるわけでもなく、ただフラフラ、フラフラ、そんな様子を見て、理由も分からずにただ可哀想だと、そう思つたのです」

「私はどうしていいか分からずに一人で海の上でオロオロ、オロオロ、していたのです。そうしているといつの間にか手の数が、一本から二本へ、二本から三本へとどんどん増えていったのです。それで更に混乱していた私に誰かが声を、掛けてきたのです」

「静かな、低い声で誰かは私に言ったのです」

——パシヤ

——パシヤ

一人が水を撒いた。二人が水を撒いた。或いは一人が何度も水を撒いていたのかもしれない。

「柄杓をくれ」

「その声が確かに聞こえました。驚いて周囲を見渡しても、そこにはいつも通りの海と、その海から突き出ている手があるだけだったのです」

「私はそこで、初めて恐怖を感じたのです。おかしなことにそれまでは海面に伸びるその手を全く怖いとは感じていなかったのです」

——パシヤ

誰だ、誰が水を撒いている。音が、水の音が静かに部屋の闇に吸い込まれる。

——パシヤ

幾人かが、自分の身体に水が掛けられているように錯覚した。冷たい、冷たい、身体が冷たい。

「そこからひたすらに、柄杓をくれ、柄杓を、柄杓を、と声が私に語り掛けてきたのです」
「やめて！怖い、嫌、沈むのは嫌なのです！そう思って耳を塞いでも声は私の頭の中に、

直接響かせるように語り掛けてくる！逃げなきや、逃げなきやいけないのです！思考とは反対に身体は凍り付いたように動かない！」

「そこで私は耳と目を閉じて、その声が聞こえなくなるのをじっと待ったのです」

——パシヤ

蠟燭の暖かさがだけが、凍り付きそうな身体を癒してくれるように感じた。

「それでも、いつまで待っても声は鳴りやみませんでした。柄杓を、柄杓を。柄杓なんて持つていなかった私にはどうすることも出来なかつたのです」

「でも、どうにかしないとこの声は消えないと思って、柄杓の代わりに高速修復材の入ったバケツの中身を捨てて、その手に差し出したのです。その手がバケツを受け取った途端、ピタリと声は止んだのです。そこでホツとして彼が満足して消え去るのを待ったのです」

——パシヤ

——パシヤ

——パシヤ

そこで一息、電は間を置いた。誰かが自分の身体を抱いている、寒い、冷たい。

「彼らはそこで、空のバケツに水を汲んで、そのまま私に水を掛け付けてきたのです」

「冷たい、そう思った時には手はバケツにまた水を汲んでいたのです。まさかまた、と

思っていると想像通りにその手は水を掛けてきたのです。いったい何がしたいのか分からぬまま、手は私にひたすら水を掛けてきたのです」

「逃げよう、そう思っても身体は震えてまるで動けなかつたのです。何度も何度も水を掛けられ続けている内に、私は寒気を感じてその場に蹲ってしまったのです」

——パシヤ

語る電の瞳には恐怖の色が見えなかつた。恐ろしい体験をしてきた筈、なのにその瞳は揺れ動く蠟燭のように優しく暖かだつた。

「冷たい、冷たいがいつの間にか悲しい、悲しいに変わつてたのです」

「悲しい？何故？私が悲しい？違う、そうじゃない、悲しいのはきつと……」

「そう思つた時、海面から伸びる手が泣いているように見えたのです」

——パシヤ

「泣いている！」

「その事に気が付いた時、私は考える間もなくその不気味な手に自分の手を伸ばしていったのです。その時もずっと水は掛けられ続けていたのです」

「でも、掛けられた海水に混じつて、自分の目からも涙が零れていたのです。なんで泣いていたのか、自分でも全く分からなかつたのです、でもとても悲しくて、寂しくて、そんな気持ちになつたのです」

「ごめんなさい、ごめんなさい、私は意味も分からず泣きながら謝り続けていたのです
寒くない、水の音はいつの間にか消えていた。」

「泣いて、泣いて、謝って、謝って、身体に掛かる水が自分の涙だけになっていくことに
気が付いた時、手はいつのまにかいなくなっていたのです。水を掛けられ続けていた筈
なのに身体には涙と波しぶきで軽く濡れた跡しか残っていませんでした」

「その場には中身のないバケツだけ、浮かんでいたのです」

「あれが誰の手だったのか、それは今も分かっていないのです。でも私が手を差し伸べ
たこと、それは間違いないんじゃないかと、きつとそうだと確信しているのです」

沈黙が広がり、電は語りを終えた。

——。パシヤ

最後に一撒き、水が跳ねたような気がした。

怪異の夜はまだ続く。

3. 付喪神

深夜、誰もが寝静まり、静寂だけが虚空に消える。

ヒトに非ず、ヒトで亡き者達が静寂の海で跋扈を始める。

「それは、いつも大切に使っていた包丁に小さな欠けが入ったことから始まりました」

次なる語り手は海で戦わずとも、厨房でこそ力を発揮する間宮であった。

その語り口にはおどろおどろしい雰囲気は見られず、聴収は少しばかり肩透かしを食らったような気分であった。

「先ほどまでの皆さんの話に比べると幾分か地味かもしれませんが……」

一言、そう前置きを持って間宮は語りを続けた。

——シャツ

はて、これは一体なんの音だろうか。聞こえ慣れぬ音が静かに染み渡ったような気がした。

「大きく罅割れた訳ではなかったのですが、研ぎ直すには少し時間が掛かりそうだと思います」

「何か固い物に打ち付けたわけではなく、ただちよつと力加減を誤ってしまったことと、あ

とは純粹に耐久の問題だったのではないかと思えます。どれだけ大切に扱おうとも、どれだけ丈夫な物であっても、物はいつか朽ちていきます。ただその日はまだその時では無かった、だから私は後日研ぎ直す為に丁寧に住舞い、その日は予備の包丁を使っています」

「やはり、いつもとは僅かに感覚が違うような気がしていましたのでなるべく早く直そう、とそう思っていました」

——シャツ

「異変に気が付いたのはその日の片づけと、翌日の下ごしらえを終え、就寝しようと厨房から出て扉を閉めようとした時でした」

「ようやく本番か、と誰かが僅かに期待を抱いた。合わせて室内を優しく照らす蝋燭の火がブワリと震えた。」

——シャツ

「誰もいない筈の厨房から音が聞こえたんです」

「シャツ、シャツ、という音でした」

「勿論、厨房の扉を閉める前にガスの栓が閉まっているか、電気は切っているか、それらをしつかり確認しているので誰かが忍び込んでいたのならその時に気が付く筈です。そこで誰もいないのは確かに確認した筈でした。でも確かに音が聞こえたんです」

—— シャツ

間宮は途切れることなく語りを続けた。

「もしかしたら、食いしん坊な誰かが、私の点検をすり抜けられるような隠れ場所を見つけて潜んでいたのではないかと、そう思つてつまみ食いしている誰かが隠れる間もないように勢いよく扉を開けたんです」

「でもそこには誰もいませんでした」

「おかしいなあ、と思いつながら念のため誰かが隠れられそうな空間を隈なく探しましたが、人の一人も、妖精の一体も、エラー猫の一匹も、そこにはいませんでした」

—— シャツ

「不思議に思いながらも、また厨房を出てまた扉を閉めました。そこで扉に耳を当てているとまた聞こえてきたんです」

「シャツ、シャツ、という音が確かに聞こえていたんです」

「私はそこで怖くなりました、どうしようか、誰か呼んで来て一緒に見てもらおうかしら。そう思いましたが、時刻を考えると殆どの方は就寝している筈で起こすのも憚れました。仕方ない、そう思つて勇気を出してもう一度だけ扉を開けてみました」

—— シャツ

「やはり、そこには誰もいませんでした。私はゾツとしました。何が起きているのか、誰

か潜んでいるのか、さっぱり分からなくて！怯えながらも一度全体を点検して！それでもやっぱり誰もいないし、音を鳴らすようなものは何もなかったんです！」

「シャツ、と音が聞こえました。部屋の外で聞いた時は何度も続けて、シャツ、シャツ、と聞いていたのにその時は一度だけでした。そこで音が聞こえてきた方に目を向けると、綺麗に片づけたはずの机の上にそれはあつたんです」

——シャツ

より鋭く、切り裂けそうな音が聞こえた。刃物のようで冷たく恐ろしく感じられるその音は、反して、どこか優しく温もりを持っていた。

「包丁、でした」

——シャツ

嗚呼やっぱりそうか、と誰かが予想が当たったことに満足している中、間宮は語り続ける。

「確かに数を確認して棚にしまったはずの包丁が一本、机の上にあつたんです。まるで今そこに現れたように、当たり前のようにその包丁はそこにありました。そんな馬鹿な！そう思いました。当然です、厨房を預かる者として、刃物を管理を怠るわけがありません。毎日きちんと整理して片づけていたはずのそれがそこにあるのは、絶対にあり得ないことでした」

「恐る恐る、その包丁を手にとるとそれはその日、欠けてしまった包丁でした。どうしてこれがここにあるのか、そう考えながらも、とにかく刃物を出したままにしておくわけにはいかないと、それを仕舞い直しました」

——シャツ

「包丁が何故か机の上にあつたこと以外は、特におかしなこともなかつたので、怪音の原因はまた夜が明けてからにしようと思ひ、厨房を出ようと扉に手を掛けました。その時、カタツと音がなりました」

「その音に反射的に飛び上がりそうになりながら、そつと後ろを振り返りました」

——シャツ

ゴクリと、誰かが息を飲む。何が地味なものかと、誰もが背筋に刃物を突き付けられているように錯覚した。

「あつたんです！包丁が！今、たつた今！仕舞つたばかりの包丁がそこにあつたんです！私は恐ろしくて、外間も気にせず泣きそうなつて！へたりこんで包丁から距離を取ろうとしても扉に背が当たつて！厨房の中で、その包丁だけが嫌に大きく見えて！」

——シャツ

一度、恐ろしさに身を固めるような動作を取る間宮だが、捲し立てるように語りを続けたあと急に静かになつて一端口を閉じた。

「でもそこでまた音が、シャツ、という音が聞こえたんです」

「私はハツとなつて気がつきました。この音は、包丁を、刃物を研いでいるような音ではないかと。それに気が付いた時、私はまるでその音が泣いているような音に聞こえました。シャツ、シャツ、と泣いているんです」

「途端に、恐怖は消え去りました。あれほど大きく見えていた包丁が、今度は小さく身を縮めて震えているように見えました」

——シャツ

——シャツ

——シャツ

「私は慌てて照明を付け直すと、厨房の端に置いてある棚から研ぎ石を取り出して、一心不乱に欠けた包丁を研ぎ始めました」

「シャツ、シャツ、と深夜の厨房には刃を研ぐ音だけが染み渡っていました」

「それでそのまま研ぎ続けて、気が付けば窓の外が明るくなっていました」

——シャツ

——シャツ

——シャツ

「手元を見ると、十分に使用に耐えられるだけの切れ味を取り戻した包丁がありました」

「自分でも、なぜ夜中にこれほど熱心に研ぎ直していたのかよくわからなかったのですが、そろそろ朝食の用意をしなければならなかったので、その包丁を持ったまま寝不足の目を擦りながら厨房に立ちました」

「皆さんからも、珍しく眠そうだと言われたあの日の事です」

「そうか、と誰かが納得した。」

音は聞こえない、もう包丁は研がれたのだ。

「どうしてあの時、包丁が机の上にあつたのか、徹夜をしてまで研ぎ直そうと思ったのか、たぶん包丁が可哀想だと思ったからでしょう」

「きつと、あの包丁は欠けてしまつて使われなかつたのが我慢ならなかつたんじやないでしょうか。それか壊れてしまつて捨てられると勘違いしたのかもかもしれません」

「長く、そして大切に使っている物ならば、きつと自分から直してくれと言ひ出してもおかしくはないと私は思っています」

間宮はそれで語りを締めくくつた。

蠟燭の火は揺れ動くことなく、静かに明かりを灯し続けていた。

怪異の夜はまだまだ続く……

4. 息抜き小話：尻目

理由もなく食堂で始まった百物語、流石にずっと話続けていると疲れる、それにそろそろ尿意を催してきた。そう考えた島風は少し休憩しようと提案した。

皆同じような気持ちだったのか少し休憩することになり、島風は急いでトイレへと向かった。

「あれ……提督……？」

無事に尿意を発散した島風はトイレから出た時に廊下の端に不思議なものを見つけた。

「えっ、でも、あれ？」

その物体を島風は何度か目を擦りながら確認するが、それはいつも見慣れている制服に身を包んだ提督、つまり自分達の所属する鎮守府の司令官であった。ただその恰好がおかしかった。

——ぺかー

「光ってる……」

——ぺかー

尻が光っていた。

それはもう明々とペカーッと光っていた。

さらに言えば、なぜか四つん這いで光る尻を島風のいるほうに向けて歩いていった。

「……………」

島風がもう一度ごしごしと目元を擦るが、確かに提督の尻が光っていた。

——ペカー

「て、てーとく!?!」

——ペカー

廊下の曲がり角の先に消えた提督を慌てて島風は追いかけた。いま見たものが現実かどうかまったく理解できなかったからだ。

勢いよく角を曲がると、そこで島風は誰かの背中にぶつかった。

「ん? どうした島風?」

二本足で立っていた、尻は光っていなかった、そこにはいつも通りの提督の姿があった。

「てい…とく…? ほんとに提督?」

「俺がここの提督じゃなくて他に誰が提督だって言うんだい?」

「いや、でもだって、さつきお尻が…」

「お尻？　なんだかよくわからないけど、今日は非番の皆で百物語をしているんじゃないかな？　戻らなくていいの？」

「おう！　そうだった早く戻らないと！」

そう言つて、さつきのはきつと何かの見間違ひだったのかな、と考えながら島風は廊下を引き返した。

うーんと唸りながら廊下を歩く島風だったが、そこでまたもおかしな現象に出会つた。

「あれ？　提督？　さつき廊下の向こうにいつてたんじゃ…」

「ん？　どうした島風？」

廊下の向こうであつたはずの提督が何故か自分が来た方にいたのである。

「え、だつてさつき提督は向こうに……あれ、あれ？」

「向こう？　なんだかよくわからないけど、今日は非番の皆で百物語をしているんじゃないかな？　戻らなくていいの？」

「そうなんだけど、さつき確かに……」

ぶつぶつと呟きながら島風は提督の横を通り抜けていった。

その島風の背中に向けて提督は声を掛けた。

「ところで島風……」

「ん、何ていとく?」

「さつき島風が見たつて言つた提督つてもしかして……」

声を掛けられた島風が後ろを振り返つた。

——ぺかー

「もしかしてこんな感じ?」

——ぺかー

尻が光つていた。というより尻に付いた目が光つていた。

——ぺかー

——ぺかー

——ぺかー

「きゃああああああああああああああ!!」

あまりの気持ち悪さと不気味さに島風は思わず悲鳴を上げて食堂まで走り去つた。

あとに残された提督は何度かお尻を点滅させたあと、何食わぬ顔でズボンを引き上げた。

「計画通り」

まるで死の手帳を手に入れたニューワールドのゴッドのように笑みを浮かべる提督であつた。

仕組みは簡単、予め肌色の薄い布に目を描いておく、それを尻の上に被せ布の下に懐中電灯を忍ばせおく。あとは誰かが廊下の端に見えるのを見計らってズボンを降ろし、電灯を光らせ目を描いた布を被せた尻を突き出したがら四足歩行で廊下を曲がる。

次に、気になって追って来た艦娘に何食わぬ顔で廊下を引き返させると、窓から脱出し外を通って全力ダッシュで廊下の反対側の曲がり角に戻る。

そして廊下を引き返してきた艦娘に何食わぬ顔で接する、艦娘が自分の横を通りすぎたのを確認すると再びズボンを下げ、尻を突き出す。

実にシンプルで幼稚な悪戯であった。百物語に誘われなかったことに拗ねただけのちよつとしたおふざけであった。

その後、島風の反応で味を占めた提督が同じことを実行しようとするが、島風に言われ様子を見に来た加賀が冷静に提督の尻目掛けて右ストレートを放ったことで、提督は尻から煙を出しながら気絶した。

——ペカー

5. 河童

「河童っているだろ？」

次なる語り手は天龍であつた。

世間話を始めるかの如く軽い口調で彼女は語り始めた。

「あの川辺に出るっていう、胡瓜が好きで頭に皿が乗つたあの河童な」

「海の話しているのになんで川の河童なんだって顔しているな？まあ最後まで聞いてくれれば分かるんだけどさ、とにかく俺はその河童にあつたんだよ、遠征に出てる時にな」

河童とは字の如く、河の童である。とても有名な妖怪であるが遠征に出ている時、つまり海で合う怪異としては不自然ではないかと、誰かが首を傾げた。

「正確なこと言えば海の上で合つたわけじゃないんだ」

「あれはどの辺りだったか、南に下つた所で赤道直下くらいまでいった所にあつた小さな島でアイツらに出会つたんだ。かなり長距離の遠征に出た時のことだったから、そろそろ一休み入れるか、そう思つてその小島に寄つたんだ。それで皆で飯食つたりしながら少しのんびりしてたらな、島の森の方から、ガサゴソ、ガサゴソ、という音がして

きたんだ。風も吹いていなかったし、人が住めるような大きさの島には見えなかったから獣かなんかかと思つたんだ」

「少し警戒しながら森の方に目をやってたらそいつらが出てきたんだ」

——ガサゴン

暗闇の中で、誰かが蠢いた気がした。誰もが身じろぎせず語りを聞いている。

「河童だ！ そう言えたら面白かったのかもしれないけど、残念なことにそいつらはとても河童には見えなかった」

「まずは頭に皿が無かった、それに水かきとかも無かったし、あと肌も少し黒っぽい色合いで茶色の毛も生えていて、なんといか猿と人の中間？ そんな感じだったんだ。まあ見たことは無かった生き物だけど、たぶん猿の仲間だろうなあ、なんて思いながら見たんだよ」

「あいつらも普段は滅多に来ないであろう海からの来訪者に興味があつたんだと思う。最初の一匹に釣られるようにまた何匹か森から出てきたんだ」

——ガサゴン

部屋を走り回っている。何匹も、何匹も。

「それを見てちよつとマズイかなあ、つて思つてた」

「猿つてのは力が強いし結構狂暴なイメージがあつたからさ、縄張りを侵されると勘違

いして襲われるんじゃないかって。いぎとなればこつちも実力行使に出る必要があるかもしれない、そう思ったからアイツらを刺激しない内に早いとこ島を離れようかと思つたんだ」

「そう思っている内に、アイツらの内の一匹が恐る恐る近づいてきたんだ。敵意は感じられなかつたし、なんとというか観察してくるような目線で見えてくるから、こつちも下手に動かずにじつとしてたんだ。それである程度まで近くに來たところまで暫くジツとこつちを見てきたかと思うと、急に森の方に振り向いて鳴き声を上げたんだ」

「なんとというか形容しにくい鳴き声だったんだけど、鴨とかの鳴き声をもっと低くしたような感じで何に近いかと言えば蛙だったかもしれない、ギャ、ギャ、って感じで鳴いてんだ」

——ガサゴソ

踊っている？笑っている？それはそれは楽しそうに、それはそれは愉快そうに。

——ガサゴソ

誰かが後ろを振り返る、そこには誰もいない。

「ヤバいか？そう思つて撤退しようとしたんだが、アイツらはまるで踊っているみたいな動きで、手を叩きながら森から出てきたんだ」

「普通なら威嚇かなんかだと思ふんだろうけど、そいつらの姿はなんとというか遊んでい

るみたいでな、すっかり警戒心が解かれちまった。そんなもって近くまで寄ってきて踊るもんだからこつちもなんだか楽しくなつてな、俺も皆も笑つてた。今思えば、きつとあれはアイツらなりの歓迎の挨拶だったんじゃないかと思つてゐる。それでその後も森の方から食えそうな木の実みたいなの持つてきてくれたり、チビ共は向こうのチビ共と追いかけてこし始めたりしてき」

「それでかなり賢い生き物なんだなあ、とか思つてたら、アイツらが砂浜になんか絵みいたのを書いていたのを見つけたんだ。俺も興味本位で何かやつてるのかと覗いてみたんだ。そしたら丸とか棒とかを並べたり組み合わせたりしたような奇妙な絵を書いてたんだ。しかも書きながら仲間と、ギャ、ギャ、つていいながらまるで会話してるみたいなんだ」

——ガサゴソ

嗚呼楽しや楽しや、踊れ歌え。誰かが踊り誰かが歌う。室内には天龍の語る声だけしか響いていない。

「それでよく見ると同じような絵が、いや絵というより記号みたいなのが何度か描かれていて規則性みたいなのを感じられたんだ」

「まさか！ そう思つたさ、それはまるで文字じゃないかつて。ずっと昔の象形文字に似たような物があつたような気がして、コイツらには確かな知性があるんじゃないかつて

な。これはもしかしたら大発見なんじやって思った。でも結局、この事を公式に報告することはしていない」

「だつてさ、可哀想じゃんか。いつからあの島に住んでいたのかは知らないけど、もしアイツらのことが明らかになつたらきつと大勢の奴が寄つて集つて調べ始めるだろ？ そうなつたら、アイツらがいままで平穩に暮らしてきた物が台無しになつちゃうんじやないか？ な。それが良いことか悪いことか俺には判断出来ないけどさ、こいつらが楽しく暮らしてんのを邪魔するのはなんか違うだろつて、そう思つたんだ」

——ガサゴソ

手拍子の音が、合わせて歌う声が、釣られて踊る足音が、楽しき宴が、闇の中で静かに盛大に執り行われる。

誰かが辺りを見渡す、顔を知る誰かがそこにはいた、それだけ。

「それで暫くの間そいつらと戯れてたんだけど、流石にそろそろ出発しないとイケない、それで別れの挨拶がてら近くにいたそいつらの頭を軽く撫でて、海に出たんだ」

「少しばかり名残惜しい、また近くに來ることがあれば寄つてみるか。そう思いながら島の方をもう一度だけ見返したんだ。するとアイツらも名残惜しいのか海に身体が半分くらい浸る所まで入つてきてこつちを見てたんだ」

「そこで、アイツらに変化が起きた」

宴もたけなわ、賑やかな宴もいつかは終わる。

——ガサゴソ

——ガサゴソ

——ガサゴソ

天龍は楽しかった思い出を語るように、そこまで語り切ると、一度言葉を止め息を吸った。

「驚いた！初めに毛が抜け始めて、皮膚も少し艶が掛かって水を弾いているようだった！やがて手足の指の間の皮膚が広がって水かきみたいになった！それで抜け落ちた頭の毛の下からツルンとした皿みたいな頭が出てきたんだ！それで手を振って、歌うように鳴いてたんだ！ギャ、ギャって！河童だ！あれは河童だ！」

「その時になってようやく気が付いた、アイツらはきつと河童だったんだって」

「まさか河童が陸の上であんな毛むくじやらかな猿みたいなのが恰好だとは知らなかったから心底驚いたさ」

——
静寂が広がる。宴は終わり心地よい余韻だけが残る。

「ここからまた少し不思議なんだけど、遠征から帰ってあの島を探そうと海図を開いたんだ。だいたいこの位置は覚えていた、その筈なのに何度調べてもあの島の位置がはつき

り分らないんだ」

「それで記憶を頼りに近くまでいつて探したこともあったけど、島は全く見つけれなかった。確かに間違いなくあの島は存在する、一緒にいたやつもアイツらの事を覚えていたからそれは間違いないんだ。それなのにあの島はまるで消えてしまったかのよう

に、見つけることが出来なかった」
「残念だとは思ったさ、でもきつとそれでいいんだ。アイツらはきつと今も、あの島で楽しく暮らしてんだからさ」

天龍は語り終える、遠く遠くの島を見つめるように、懐かしむように。

どこか冷たい物が感じられていた室内が、ほんの少し、蝋燭の明かりの分だけ暖かくなつた気がした。

——ガサゴソ

どこか遠くで、宴が始まった。

6. 蜃

「それじゃあ次は私の番かしら〜?」

どこか間延びした口調で語り始めたのは天龍の姉妹艦である龍田であった。

——ふわり

何かが沸き立った。

「あれはお休みの日だったんだけどね、夜中になんとなく目が覚めちゃってね。それで布団から起き上がって窓の外を眺めていたの」

「その日は月がとっても綺麗でね、満月じゃなくて少しだけ欠けてて十六夜くらいだったかしら? それで窓から入ってくる月明かりが不思議なくらい神秘的だったわね」

「隣でぐっすり気持ちよさそうに眠っている天龍ちゃんの頭を撫でながら、ゆっくり静かにその月を眺めていたわ」

その言葉を聞いた天龍が少し恥ずかしそうに縮こまる。それを愛おしそうに眺めながら龍田は語り続けた。

「ふとした時に見上げる月はまるで止まっているようで、静かな星空と相まってまるで

世界の時も止まっているかのように錯覚する。でもじっくりと観察していると月だつてゆっくりとその位置を変えているの」

「知識では分かっているけど月が実際に動いているのを実感することなんてあんまりないんじゃないかしら？ その日はそれが分かるくらい暫くの間、その月を眺めていたわ」

「気が付けば月が海の向こうの地平線に近くなっていた、その時にそれは現れたの」

外からの光を遮るために閉じられていた暗幕の隙間から、光が、月の光が、冷たい暗闇に閉ざされていた室内を優しく照らした。

蝋燭の火で揺れる影は、淡く存在を散らし、反して月光は、隣の誰かの姿をはつきりと映し出す。

「一瞬だけ、目を閉じてまた開いた時、それはもうそこにあつた」

「思わず私は手を、今はもう届かないそこに手を伸ばした。かつての面影は残っていても今はもう別の物となつている私の生まれ故郷。それがあの時の、あの当時の姿のまま、月の下に遠くの海の上に聳え立っていたの」

「どうして？ そう思つて手を伸ばして、窓ガラスに手が当たつて。どうして？ そう思つて顔を近づけて、窓ガラスに顔が当たつて。どうして？ 届かない、そこにあるのに届かない。窓ガラスがあるからじゃない、きつと一度目を離してしまえばあれは消えてしまふ。だから届かないの」

どんなモノであつても故郷を思う念はきつとある。誰もが一時、望郷の念に駆られた。

「待つて！そう思いながら、それでもあれを目指そうとは思わなかつたわ」

「あれはきつとそうやつて追い求めても意味のないモノ、どんなに手を伸ばしても、どんなに願つても、あれは手に入らない幻。手に入れようと思つてはいけない影」

「きつと沢山の人達が願つて追い求めて、そして破滅していった。そういつた、甘美な麻薬のような何か。痺れさせて、慄れさせて、思い出させて、忘れさせない、そんな、何か」

龍田は一度目を閉じて、何かを求めするように手を伸ばした。伸びきつたその手は崩れるように落ちる。それでまた龍田は目を覚ました。

「きつと、科学的なんて陳腐な言葉で語つてしまえば、あれはただの蜃気楼。ただの気象現象で、それ以上のなんの意味もない」

「でも本当にただの自然現象だったのか？だつて蜃気楼が起きるのは昼、太陽の光が屈折してそこにある物を歪ませるだけなの。私は夜に、それも何も無い海の上にあれを見たの。だからあれはきつと誰かの悪戯なんじゃないかつて私は思うわ」

「誰かつて？そうね、私達の想いを汲んであれを見せてくれた神様か、それかなんてことない海に棲む誰かじゃないかしら？」

遠く、物理的に、時間的に、心理的に、何もかもが遠く海の向こうに消えていく。ヒトはそれを悲しいと思ひ、寂しいと思ひ、それでも忘れずに離れてゆく。

「また一瞬だけ目を閉じてまた開いた時、あれはもう影も形も無くなって、静かな海と綺麗なお月様だけが空に浮かんでいた」

「暫くの間、何かに憑りつかれたように私は何も無い海を、窓に張り付いてじつと眺めていた。もう何も無いのに未練がましく外を見ていた」

「その時背後で、衣擦れの音が聞こえた。天龍ちゃんが身じろぎしたその音で、私は夢の世界から目を覚ましたの。そこにいた天龍ちゃんを見て、もう一度だけ窓の外を見て。それでお仕舞い、泡沫の夢は終わり」

——ふわり

何かが崩れ消え去った。

「あれが本当にそこにあつたのか、ただの特殊な気象現象が見せた幻だったのか。それは分からないわ」

「あれが幻であれ、そうでなかったにせよ、私はあれが見えて良かった。もう一度だけ見えて良かった」

「私はいまここに居る、隣には天龍ちゃんも居る。だからもうそれで良いの」

「これで私の話はお仕舞い、ちよつと短くて、もしかしたらつまらなかつたかもしれない

けど、これでお仕舞い」

柔らかな口調のまま、龍田は語りを終えた。

月明かりが雲の向こうへと隠れ、再び闇が支配を始める。

7. 不知火

「私自身は、あまりそういった不思議な怪異に出会ったことはありません」

そうして語り始めたのは不知火であった。

「というわけでこれは、人伝に聞いた、というより私が生まれた時から知っていた話です」

——ぼっ

火が灯っている、蠟燭の火が。

「なぜ私生まれながらにして知っていたか、初めに種明かしをしてしまえば、この話が私の名前の元となったからです」

「不知火、陽炎型二番艦不知火の事ではなく、不知火とそう呼ばれる怪火が存在していたそうです。していた、と何故過去形なのかと言うと、不知火は現代では科学的に解明された自然現象となっているからです。漁火といって、軍艦には縁があるものではないですが、漁船が魚をおびき寄せるために灯す明かりがあります。この明かりが屈折し、本来見えない距離からそれが見え、海上に不思議な明かりが灯る現象。これを九州のとある地域で不知火と呼ぶそうです」

「かつては不知火が見える日は近場の者達はこぞつて見物していたそうです」

——ぼっ

俄かに、部屋が明るくなった気がした。

「しかしこの不知火、最初にも言ったように現代では自然現象として考えられています。ただそれを踏まえた上で考えると幾つかおかしな点が挙げられるのです」

——ぼっ

一つ。

「まず一つ目、不知火は龍神の起こす灯だと言われていたという文献が存在することで「す」

「不知火は海に棲む龍神が起こした灯であり、どこか神聖視されていたようなことが書かれているそうです。さらにそこには、龍神の灯、龍灯が出る日は近所の漁村では漁船を出すことを禁止していたそうです。ここで思い出して欲しいのは、龍灯、つまり不知火の元となる光源は漁船の灯りだということですよ」

「もう気が付いているでしょうが、漁船が出ていない筈の海で漁火が元となる不知火が発生するなんて有り得ないでしょう」

——ぼっ

二つ。

「勿論、その文献の記述が正確かどうかは分かりません。本当は不知火など知ったことかとはかりに漁に出ていたのかもしれない。しかしそうするとまた可笑しな事に気が付くのです」

「同じ海域の漁ということとは、どの漁船もきつと漁火を灯して漁に出ていたことでしよう。そうなると海には漁火がはつきりと輝き、少し遠くに見えるだけの不知火を人々が怪火だと騒ぎ立てることはないのでしょうか？ 私ならきつとこう思います、随分と沖に出ている船がいるな、と」

「こうなってしまうと、そもそも不知火という言葉が生まれなくなってしまう」

——ぼっ

ふと語りから耳を離し、隣を見ればやけに隣人の顔がはつきりと見える。その影も。

「次に二つ目です。この不知火は古くは日本書紀に記述されていることです」

「そこに記された、情報として残っている不知火の最古の目撃譚は西暦が始まって百年もしていないような時代の物です。この時代は未だ弥生時代であり、今と比べると明らかな技術的な開きが存在しています。そこで考えて欲しいのは船です。この時代にもしっかりとした船はありました。日本から海を渡り、大陸まで行けるような船があったことでしょう。民間でも、今でいうカヌーのような形状の船はあったそうです」

「そこで思うのは、果たしてカヌーのような船で、陸地から見えないような沖合いまで出

て漁をしていたのでしょうか？この時代、今ほど人口も多くなり、食料もそこまで大量には必要ではなかった筈です。なのにわざわざ沖合まで出る必要があったのでしょうか？」

影が二つに割れたように見えた。一つだけの影が小さく揺らめいている。

——ぼっ

影が三つに割れたように見えた。影は一つだけ。

「これは完全に私の推測ですが、陸地でも稲作が流行り始めた時期に危険を冒してまで沖合に漁に出る必要は無かった、私はそう考えます」

「すると、不知火の元なる遠くの漁火の存在も無くなってしまう。これではその時代に目撃譚が残っているのはあり得ないということになり、逆に漁火が無くとも不知火が存在していたことの証明となるではないでしょうか？」

——ぼっ

——ぼっ

——ぼっ

幾つも灯り、幾つも揺らめく。

一つ灯り、広がり、静寂の海に溶け消えていく。

「三つ目に、漁火についてです」

「現代でこそ、便利な電灯が存在し、かなりの光度で海を照らすことが出来ています。しかし、不知火は今よりもずっと昔から見られてきた現象です。おそらくかつては電灯など無かった筈ですので、漁火の名前の通り火を使って海を照らしていた筈です。そうなる」とまた可笑しな事に気が付くのです」

「今日の前にある蠟燭のように、火は燃やす素材にもありますが現代の電灯に比べて光が弱いでしょう。そうすると、どれ程の光の屈折があつたのかは分かりませんが、このようなちつぽけな明かりが遠くまで届くものなのでしょうか？それを考えると、昔見られた不知火が本当に漁火であつたのか疑問に思います」

——ぼっ

「そして最後に、またこれも文献の記述からなるのですが」

「不知火が出ている日に、実際に船で不知火を追いかけた記述です。そこには追いかけても追いかけても、その分不知火の方が逃げていく、といったような記述があります。成程、確かに不知火が光の屈折によるものなら追いかけても捕まえることは確かに不可能でしょう、虹を追いかけるのと同じことです。しかし、ここで一つ気になることがあります。水平線に見える不知火を求めて船を出した、どれだけ追つても逃げていく、この記述です。私がある場にいたのならきつとこう記述したことでしょう、どれだけ近づこうとしても全く距離が縮まらない、と」

「そうです、古の記述では、まるですぐその見える位置にある物が、どんと動いているような印象を受けるのです」

——ぼっ

部屋中が灯で満ち満ちた気がした。不思議と熱は感じない、蠟燭の火だけが熱を放つ。

「長くなりましたが私が言いたいのはつまり、本当に不知火はただの自然現象なのか？ということです。科学的な証明には全て現代であることが条件に組み込まれている気がしてならないのです」

「もしかしたらかつて、本当に不知火は何かの、それこそ本当に龍神の仕業であったのかもしれない。それに、そう考えた方がなんとなくロマンチックではないですか？」

「む、何でしょうその顔は、私がロマンなどと語るのはおかしいとでも？不知火に落ち度でもっ。」

最後にお決まりの台詞を持って不知火は語りを終えた。

不知火が本当にただの自然現象であるか否かは、誰も分からない。

——ぼっ

どこかでまた火が灯る。

怪異の夜を静かに照らす。

8. 息抜き小話：すねこすり

「くつくつく……」

夜の静かな鎮守府の廊下を一人の男が歩いていて、いったいお前はどの何の黒幕なんだ、と誰かから突っ込まれそうな笑い声を出しながら、その男は歩いていった。

「さあて、次はどうしてくれようかあ」

くけけくと、気持ちの悪い笑みを浮かべながら男は思案に暮れていた。

「尻目はなかなかインパクトがあった、なら次は定番としてろくろ首か？ いや待て、体中に目を描いて全裸で百目鬼を演じるのも一興か？」

ぶつぶつと声に出しながら次の悪戯を考案しているその男は変態であった。

違う、変態ではなく提督であった。全裸で艦娘を驚かそうとしている時点で提督ではなく変態と呼ぶほうがやはり正しいかもしれない、しかしそれでも彼は提督であった。こんな変態を鎮守府に着任させた大馬鹿野郎はいったいどのどいつか、問い詰めて思い直すように言っつてやりたいと思つても彼が提督である事実に変わりない。

「やはり全裸であるべきか……」

そんな提督の姿を背後から誰かが見つめていた。

その誰かは提督の眩きを聞き、呆れたような蔑むような視線でその背中を眺めながら迷いなく廊下の電灯のスイッチに手を掛けた。

「それとも……ん？ 停電か？」

誰かがスイッチを落としたことにより、廊下は一時的に闇に包まれる。生憎と月明りも今は雲の向こう、目が慣れるまでは殆ど何も見えない状態であった。

「しかし停電であれば非常電源に切り替わる筈。もしかして誰か間違つてスイッチを落としたか？」

急に灯りがなくなつても取り乱さない所を見ると、やはり彼はただの阿呆ではなく鎮守府を一つ預かる提督なのだ実感させられる。

その提督の足元を何かが走つた。

—— すりすり

「誰だ!？」

暗闇の中で得体の知れない何かの気配を感じ警戒態勢をとる提督。闇に向かって問いかけるが応えはない。

するとまた何かが、提督の足の間を走り抜けた。

—— すりすり

「何だ!?! 何がいる!?!」

何かは繰り返し提督の足元を駆けまわる。

—— すりすり

—— すりすり

繰り返し何かが足に擦りついてくる事に提督は気味の悪さを感じていた。

「くう!!? なんだこのむず痒い感じは!!? 正々堂々正面から掛かってこないか!」

—— すりすり

—— すりすり

提督の声に何かは応えることなく、ただその声だけが闇に吸い込まれていく。

応えぬならば応えさせるまで、そう考えた提督は覚悟を決めた。そして初めに目を閉じた、僅かな視覚をシャットアウトし、触覚のみを研ぎ澄ませる。次に足をピタリと閉じ、壁を背にし相手の接触出来る範囲を制限した。最後に腰を直角に曲げ自らの足元まで手を伸ばし、何かの接触を感じた瞬間に捕らえられるように構えた。

提督の今の姿を想像することが難しいならば、実際にやってみるとよいだろう。そしてその姿を鏡で見ると尚更グッドである。そこには真面目な顔で可笑しなポーズを取っている変人がいる筈である。

「さあ、どこからでもかかってこい!」

なんとも珍妙な姿勢のまま提督は意気込んでいるが、悲しいかな、提督の足元にいた

何かはとうの昔に走り去っていた。更に言えば廊下の電気もとつくに灯っているが、目を閉じている提督はその事に気が付かない。

どれ程の時間が経ったか、感覚を足元に集中している提督は時間の感覚すらも曖昧にしていた。

そしてそんな提督のいる廊下を鎮守府のパパラッチこと青葉が通ったことにも勿論提督は気が付かない。

やがて提督は目を開け異常がないことを確認すると首を傾げながらその場を去った。

次の日の鎮守府の広報誌の一面に自分の珍妙な姿勢の写真が『提督ご乱心!? 謎の宗教にのめりこむ!』といった見出しと一緒に掲載されるなど、今の提督には知る由は無かった。

そして、提督の足元を走り回っていた何か、もとい軽巡洋艦多摩は提督へのお仕置きを依頼された加賀から報酬であるカツオブシを頂きご機嫌であった。

「多摩だにや、猫じゃないにや」

9. アヤカシ

海に潜む異形のモノ達、ヒトは彼らを時に怪物と、時に化生と呼んだ。

「えっと、あれは随分と前の事なんですが」

赤城、航空母艦を務める彼女が今回の語り手であった。

——ザブン

高波が押し寄せてくる。ヒトでは逃れ得ぬ自然、或いは物の怪であれば乗り越えることが出来る自然。

「あの日はひどい嵐でした、視界はほぼ通らず艦載機の発着も不可能と言わざるをえませんでした。そもそもそんな天候の中で空母を運用することからして間違っているのですが、当時は提督も経験値不足で天候やその他諸々の要因を考えた編成が出来ていなかったなので仕方ないといえれば仕方ないのかもしれないですね」

「とにかく、そんな中での戦闘は困難を極めるため、出撃を中止し帰投命令が出た所では現れました」

「あれが生き物なのかそうでない何かであるのかは判別出来ませんでした。ただ、恐ろしきものとだけ理解出来ました」

——ザブン

「あれが現れる直前、深海棲艦との交戦状態になっていました。あいては駆逐艦が一体のみ、晴天であれば難なく卸せる相手でしたが嵐の中では圧倒的に敵が有利でした」

「非常にマズイ状況で私は一目散に撤退を選択しました、勿論敵も追いかけてきます。必死に回避行動を取りましたが駆逐艦が相手では速度で勝てる訳もなく徐々に距離を詰められていきました」

「このままでは罅り殺しにされてしまう！なんとかしなければ！そう思ってもどうしようもない状況で波が、黒い波が見えました」

——ザブン

魚雷の恐ろしさを知る誰かが恐怖を思い出し僅かに身を震わす。それに構うことなく赤城は語りを続ける。

「悪天候の中で視界が遮られたその状況でも何故かその波はハッキリと目に移りました」

「真つ暗な海の上にあつて、その波は黒い色をハッキリと目立たせていました。あれは何だ？それがただの波ではないことに私はとうに気が付いていました。それでもなんとなくアレの姿の全貌を見たいとは思いませんでした。きつとああいった物は目に移すものではないとそう思いました」

「そこで敵も奇妙な波の存在に気が付いたようでした、一端私から注意を逸らし今度は波に向けて砲を放っていました。しかし、波は器用にも身をくねらせるようにして敵の砲を回避していました」

——ザブン

波が見えた、黒く黒く蛇のような龍のような波が見えた気がした。

「その時、絶好の撤退の機会だったのでしようが、私は逃げることを止め敵と波を見ていました」

「どうしてそんな行動に移っていたのかは私にも分かりませんが、でも何故か目が離せなかつたんです。波が、一波、二波と敵に近づいていきました。あれはまるで目の前に敵がいることなど気が付いていないかのようにゆっくりと進んでいました。更に攻撃を強めた敵ですが、波に当たることはありません。やがて波と敵がぶつかりそうな距離まで近づいた所で、敵はこれならどうだと言わんばかりに魚雷を放ちました。あの距離ではどんな高速船でも回避は不可能だと思いました。実際、魚雷はあの黒い波に直撃しました。そう確かに直撃したんです」

「でも、波は何事も無かつたかのように敵に迫っていきました」

魚雷を受けても損傷を受けていない、その事実を聞いて今度は魚雷を持つ誰かが思わず身を震わした。

——ザブン

波が迫ってくる、恐ろしき黒き波が。

「あ、と思つた時にはもう手遅れ、波は悠々と敵に押し掛かりました」

「敵ももがいていたようですが、どこまで続いているのかと言いたくなるほどの波の繋がりが絶えることはなく、いつしか敵の姿は海の底に消えていきました」

「そして波はまた何事も無かつたかのように流れていきました」

——ザブン

向かつて来ては去るのだ、それが波なのだ。いつしかそこからその姿はいなくなる。

「恐らくですが、あの波はただ単純にあの場を通つただけで、何も私を助けようとか敵を沈めようとかそういう意志は無かつたと思います」

「現に、波は私の事など気にも留めずそのまま去つていきました。それを私はただ茫然と眺めていました。どこまで孤高でどこまでも優雅で、そしてどこまでも自由、そんな印象をアレからは受けました。そして私がふと明かりを感じて我に返るとアレの姿はどこにもありませんでした。嵐はいつの間にか過ぎ去り、雲の隙間からは薄く太陽の灯りが顔を覗かせていました」

「私はついさつき見たモノが一体なんだつたのかと、少しだけ頭を捻らせながら鎮守府に帰投しました」

——ザブン

海には怪しきモノ達が棲む、彼らは誰の指図も受けない。ただ自由に自分達のやりたようにする。それが例え、ヒトの生活を脅かす事であろうと、彼らには関係ない。彼らはヒトではないのだ。

そんな海に潜む異形のモノ達、ヒトは彼らを時に天災と、時に妖と呼んだ。

人知の及ばぬ何か、ただの生物であるかそうでないのか、それすらも分からぬ何か。ただ分かるのは抗えぬ恐ろしきモノである事、それだけ。

「最初にも言ったように、あれが何であるかは現在でもよく分かっています。報告書にもただ、謎の巨大生物と接触としか書いていないのできつと鯨か何かを見間違えたのではないかと思われることでしょう」

「でも私にはあれがそんな単純なモノであるとは思えません。私が見たモノは、そうですね、例えるならば巨大海蛇とか龍だとか言えるかもしれないような形状をしていたからです」

「アレが何であれ、きつと今もアレはどこかの海を自由に彷徨い続けている事でしょう」
波に飲まれ、蠟燭の明かりが消えたような気がした。

一瞬だけ目を閉じて、開けた時にはそこには静かに輝く蠟燭の火が確かにその存在を揺らめかしていた。

まだ火が消えることはない。